伊勢路歴史紀行（２００５．１０．８－１０．１０）

米欧亜回覧の会の会友、西井易穂さんが後援会長を務められるソプラノ歌手の秋山恵美子さんのコンサートを、伊勢のお蔭参り 300 年を記念して、伊勢で開催するという。これに相乗りして伊勢路の歴史ツアーの企画を西井さんにお願いしたところ快く引き受けていただき、会員より有志を募り実現した。会の正式な催しではないが、実に中身の濃い豊饒な旅行となった。今後の参考までにご報告する。

名古屋まで新幹線、名古屋からは関西本線の快速“みえ 1 号”を利用したが、あいにく鈴鹿サーキットと重なったため、新幹線も快速も超満員で、出だしは大変な思いであった。松坂駅で下車、この日の参加者は西井御夫妻とご友人ご夫妻に当会会員５名の計９人、タクシーに分乗し、小雨の中、先ず松坂城址にある本居宣長記念館に向う。ちょうど宣長の主著でもある“玉勝間”展が開催中で、西井さんのご手配で，館長自らの丁寧な説明を受ける。玉勝間の原稿や、古事記伝、源氏物語などの著作で、師の賀茂真淵などとやりとりした手紙、ノート、草稿文、自画像、アルファベット図と、自分の死の 1 年前に、自らの葬式の式次第、形式、参列者などこと細かに記載された遺言書など目を惹いた。我々も、この世との別れに当たってはかくありたいと思った。

宣長は木綿商の家に生まれ、一時家業も継いだが、京都に出て、医者の修業をして、医師となり、かたわら国学にのめり込んでいった。“もののあわれ”を主題の中心におき、紀州藩主などに国学を講釈し、生涯桜を愛し、鈴の音を好んだ。彼の住んだ“鈴の屋”が、記念館の近くに移築されている。蒲生氏郷の築いた松坂城の城址には、松坂市立歴史民族資料館も隣接している。氏郷は楽市楽座を取り入れ、金融業者、商人、海運業者等を育てた。松坂商人は、三井、小津、長谷川家などを生み江戸にも進出し活躍している。資料館には薬種商・桜井家へ池大雅が書いた“萬能千里膏”や“黒丸子”の看板、伊勢白粉、松坂木綿などの展示がある。本居宣長の宮と松坂神社を見ながら、城址の裏門を出ると、石畳と槙垣をめぐらした御城番屋敷の武家屋敷が並ぶ。往時の面影が偲べる一角だ。その後は再びタクシーに乗り、三井家跡を前から眺めながら通り，その近くの商人の館を見学する。これは、紙商と木綿商として、江戸、京都、大阪にも進出、天保年間の大日本持丸長者鑑で、大関に列せられた豪商小津清左衛門の商家で、奉公人も何十人も同居していた豪邸である。驚いたことに、ここの十二代清左衛門は西井さんのご先祖が養子に入ったもので、当時傾きかけた商売をみごとに再建したとのこと。明治に入り、小津家は紡績業、海運業、銀行などにも手を広げている。

白萩や同心長屋の黒き塀

宣長のやまと心や彼岸花

有名な松坂牛で昼食をとり、午後は勢和村記念館から始める。ここには伊勢水銀の原石となる鶏頭岩などが陳列されている。水銀坑跡と薬草園は、あいにくの雨のため割愛する。

次には野呂元丈の館へ。元丈は京都で儒学、本草学を学び、幕府の採薬師として、全国の山野を回り、八代将軍吉宗のお抱え医師となる。青木昆陽と共に、吉宗の命で蘭学を研究、和蘭医方の基礎を築いた人。伊勢出身の蘭学者や医師は実に多い。西井さんの研究によれば、早稲田大学の図書館にある「芝蘭堂のオランダ正月」という掛軸に描かれている２９人の蘭学者の中に、この絵を描いた市川岳山を始めに、大黒家光太夫、宇田川玄真、越村図南の４名の伊勢人が描かれているという。医師では、橘南渓、西井さんの祖父西井格太郎、富山専一，久留勝に竹川竹斎などがいる。その竹斎邸をこの日最後に射和村へ訪れた。これはこの旅での圧巻だった。郷土史家の清水さんと、竹川家当主夫人が出迎えてくれた。夫人は裏千家・茶の湯の師匠、和服姿で現れた美しい老婦人である。射和文庫と称するこの家自体が重要文化財のようなもので、藩主が遊びにきて、落書きした“月白風清”が床の間に掲げられ、秀吉の直筆手紙、浅井長政の手紙など歴史的な書や絵を貼り付けた屏風が無造作におかれていて、まじかに見られ、友人勝海舟の咸臨丸での自筆航海日記、竹斎の自著“護国論”“護国後論”の原書や、彼が幕府に呼ばれ、阿部正弘などに講じた帰りに、幕府の船で大阪まで送られたときの様子を絵日記であらわした竹斎日記〈吉葛園日記〉の一部なども手にとって惜しげもなく見せてくれる。竹斎の父正信は本居宣長の門人で、歌集〈落葉の宿〉や紀行文〈富岳日記〉〈木曽路日記〉などを残した文人の両替商で、竹斎も家業を継ぎながら、国学に傾倒、勝麟太郎始め、幕府要人やイギリス公使パークスなどとも親交があり明治 16 年に亡くなっている。　更に、ガラス器に入った伊勢白粉を，蓋を取ってまじまじと、その雲母のように輝く白い粉をみせて戴き感激する。さる特別展で出品された貴重品とのこと。水銀は奈良の大仏の鋳造にも使われたが、後に梅毒の特効薬としても使われたようだ。郷土史家の清水さんは，もっぱら今郷土の俳人で没後３００年を再来年に迎える談林派の大淀三千風（みちかぜ）の掘り起こしをやっているらしく、近く特別展を開催予定という。その夜は、明日のコンサートの主役である、ソプラノ歌手秋山恵美子さん、ピアノニスト渡辺あけみさん、画家で作詞家の山田倫子等と合同で、和気藹々と伊勢の地ビールと伊勢料理とを充分に堪能して最初の夜を過ごした。

秋麗や古文書めくるひとの指

秋灯し友垣（ともがき）あらた酒を酌む

地ビール屋での夜の宴会

同行した会員の女性３名

二日目は、西井夫妻がコンサートの準備で忙しいので、米欧亜回覧の会友５人で午前中単独に行動する。昨日のタクシーで、尾崎行雄記念館を訪れる。神奈川生まれの尾崎記念館が何故伊勢にあるのか。父親の転勤で、伊勢に１３-１４歳に滞在し宮崎文庫の英学校に学んだようだ。憲政の神様と言われ、東京市長のときワシントンに桜の苗木３０００本を送り、先妻が亡くなった後、英人テオドラと再婚、夫人の生れた英国を訪れて、欧州は連邦となるべきだと今のＥＵの創設を予言している。同時に戦後世界連邦を提案、脱軍国主義を唱えたことで有名な言論人であり、政治家。

次に訪れたのは、斎宮跡記念館である。斎宮制度は、天武天皇の７世紀から始まり、６６０年続いて南北朝時代に衰退した。伊勢神宮を天皇に代わって守るために、未婚の内親王が神託で選ばれて斎王として、京都から鈴鹿を越えて５泊６日の旅で赴任する。五十鈴川で身を清め、伊勢の神事に携わる。神嘗祭はそのうちの大事な行事である。

木犀や斎王という守り乙女

次に訪れた山田奉行所記念館は昨年に開館した。江戸時代に佐渡、長崎とこの山田に遠国奉行所をして発足、大岡裁きはここから始まったといわれる。江戸表より、支配、与力、同心、水主など数十人が派遣され、軍船，関船十数隻を保有していた。

人気なきお白洲広し秋の風

ひつじ田のめぐる山田奉行所跡

山田奉行所のお白洲

奉行所で使った軍船

午後は伊勢トピアで開催の，伊勢おかげ参り３００年祭記念コンサートに皆で出席する。アテネ・オリンピックの女子マラソンで優勝し、ベルリン・マラソンで日本新記録を出した野口みずきの母校・宇治山田商業高校が近くにあり、たまたま、野口が帰郷して、野口が練習していたマラソンコースがミズキロードとして伊勢市で命名された日にあたり、野口がテープカットに来ていた。コンサートは大成功であった。３５０席がほとんど満席となり、秋山恵美子のソプラノも、第一部は、浜辺の歌、くちなし、からたちの花など日本の抒情歌、第２部は西井さん企画の新曲“伊勢の詩”３部作の発表会。作詞は地元の画家・作詞家の山田倫子氏、作曲は古賀政男の甥の古賀譲次氏で、「橋の町」「月の雫」「古里」は

素晴らしかった。今後、伊勢の地元歌として、歌い継がれていくのにふさわしよい歌である。同席の作曲家、作詞家に花束が贈られる。最後は秋山さんの得意な、オペラ「夕鶴」「ルサルカ」「メリーウィドー」などを歌われ、非常に印象的なコンサートになった。司会を秋山さんとピアノの渡辺さんの掛け合い漫才風に進められたのも、軽妙で印象的であった。アンコール曲も何曲か歌われた。

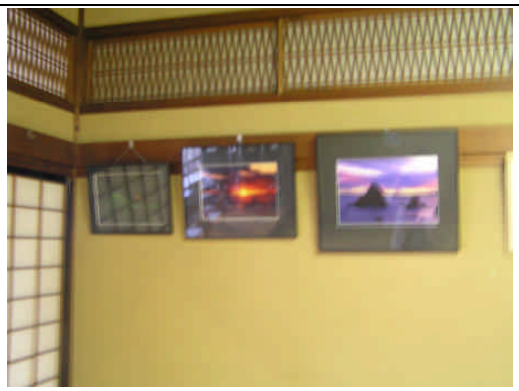
夜は，二見ヶ浦の戸田家というホテルで、コンサートの関係者と慰労会が行なわれ参加した。気持に良い、楽しい慰労会となり、且つ伊勢の料理をたっぷりと味わった。

最後の日は、マイクロバスでコンサート関係者と米欧亜回覧の会との２０人ばかりの合同ツアーとなる。案内役は西井さんである。二見が浦の興玉神社、夫婦岩から始まる。私にとって久しぶりの二見が浦である。夫婦岩は不思議な場所で、天気が良ければ、二つの夫婦岩の真ん中に富士山が見える。夏至の日には、真ん中から朝陽があがる。冬至の満月の夜は、やはり岩の真ん中から月があがる。蛙の彫像がいっぱいあって“無事帰る”などの信心の対象になっている。

初雪の富士まなかひに夫婦岩

秋霖や鵜の守（も）りている夫婦岩

夫婦岩の隣の岩、夫婦岩にも鵜がいた



右の写真：夫婦岩の中心に見える富士山

すぐ近くに米欧回覧に同行した長与専斎が日本最初の海水・温浴健康海水浴場を作ったという浜辺がある。ここは西井少年がよく泳いだ海で、西井さんの祖父もこの海水浴場開設に名を連ねている。専斎が医制７６条を施行したのは、帰国後の１８７４年であった。この海水浴場を利用し、伊勢神宮に来た皇室が利用したのが、その山側にある賓日館である。以前は旅館であったが、今はＮＰＯ法人・二見が浦・賓日館の会で運営されている。明治二十年に完成したこの宿舎は、贅沢な材料をふんだんに使った名建築である。ふんだんに見所がある。橋掛かりがないので、実際に使われなかったという能無しの能舞台は華麗な造りである。海を借景にした庭。鯛の左州と呼ばれた、日本画家中村左州の記念館もあり、客間には、ちょうど開催されていたミニ着物展は１００点余の小さな着物がいくつかの部屋に展示されていた。欄間の透かし彫りなど、見所が実に多い。

伊勢湾に流れ込む勢田川の流域には、伊勢詣での台所を支えた様々な商人とその品物倉庫が川沿いに林立していた。川から船着場があり、そこから品物がトロッコで倉庫に運ばれた。河崎地区の旧倉庫群と商人館である。ある瀬戸物屋は現在も使われて居り、３００メートルもの鰻の寝床のような倉庫を見学させてもらった。（今は１００メートルだけに短縮させているが）３００年前のおかげ参りが隆盛となったおり、５０日間に３５０万人が伊勢詣でに詰め掛け、伊勢街道は黒山に染まったという。当然宿舎も足らず、道端に野宿する者が多かったようだ。３５０万人といえば，当時の日本人口の一割である。これだけの人が、旅ができたという江戸時代も驚きである。伊勢河崎商人館は、その伊勢の隆盛を支えた商人酒問屋の家である。往時を偲ぶ資料や歴史的物品が展示されている。

この日、昼食を割烹・大喜でとる。ここの娘は最近、ソプラノ歌手として、レビューしたとのこと。あいにくコンサートがあり留守で、女将が対応してくれた。

午後は伊勢神宮の内宮参拝にあてる。まず五十鈴川で身を清め、雨の内宮を歩く。伊勢湾台風で伊勢神宮の森は相当に大木が倒されたらしい。それでも大樹がいまだ多い。平成２５年の遷宮をひかえて、新しい御地が用意され、森が開かれていた。雨に白い玉の石が濡れている。面白かったのは、西井さんの説明で、伊勢神宮とユダヤ教との関連を論じた本があるとのこと。ユダヤ教も水や塩で身を清める習慣や三種の神器の伝説が太古からあるらしく、ユダヤの失われた民が、シルクロードを伝わって日本にたどり着いたという。外宮と内宮を結ぶ５キロの参道に両側に石の常夜燈が等間隔におかれている。この常夜燈にユダヤのダビデの星といわれる六芒星が彫刻されている。これも何とも怪しげだが、これは戦争で破壊された常夜燈を戦後になって再建を GHQ に申請したところ、このマークを条件に許可されたそうだ。マッカサーがユダヤ人でその悪戯らしい。もうひとつ、面白いのは伊勢神宮の御旗が道教の旗と全く同じことだ。道教の唯一神は、北極星で、その神の名を天皇大帝という。天皇家の由来を、佛教化した道教とともに日本に入ってきたという人もいる。伊勢神宮が新嘗祭を神事として、皇室がこれを引き継ぐ事から、稲作とともに大陸から来た天皇家の由来を説く。伊勢は海に近く、上陸した地点としてもおかしくない。天の岩屋もある。

かくして、伊勢の“おかげ横丁”を散策して、それぞれに御土産を求めて、夕方、帰途についた。西井さんの準備万端、目配り心配りの行き届いた充実した歴史ツアーであった。

秋霖や遷宮御地の玉の石
秋しぐれおかげ横丁くねくねと
秋の雨老松美（は）しき伊勢詣
色鯉の紅葉と流れ五十鈴川

（２００５．１０．２２　小野博正記）

賓日館の能舞台

賓日館の大広間

賓日館のコレクション　花灯篭

ミニ着物展

おかげ参り横丁の老舗

おかげ横丁の裏手、五十鈴川

河崎のトロッコのある倉庫〈下〉

瀬戸物屋〈倉庫〉のおばあさん〈下〉